
3年Z組銀八先生～愉快的生徒と先生たち(いろんなキャラが出ます。)

銀時マニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3年Z組銀八先生、愉快な生徒と先生たち（いろんなキャラが出ます。）

【Nコード】

N0475L

【作者名】

銀時マニア

【あらすじ】

銀魂高校に何故か銀魂キャラ以外のキャラたちが…まあ作者の妄想をそのまま書いた作品なので…まあこれからもよろしく願います！！

く2ノ訓く

次でるドラクエの最新作は、ドラクエ

こんなグダグダな小説にまた付き合ってくれてありがとうございます。

って言うか正直、あまりよく小説の書き方が分からないので、感想やアドバイスお願いします。

銀八「やつと出番かよ。だいたい作者の書き方には、変なところが多いんだよ。話が唐突すぎたり、他のやつらは、中途半端に出すしよゝもうちよつと考えてかけやゴラア。」

つと頭を掻きながら死んだ魚のような目で言ってきた…このクソ天パーが…

銀八「誰がクソ天パーだゴラア！！こつちだつてなあ好きで天パーになったわけじゃねえんだよ！！俺だつてなあもし天パーじゃなかったら…」

新八「先生…誰と喋っているんですか…。」

銀八「あ？この小説書いた作者に決まってるじゃねえか。そんなことも分からないのか？だからお前は、いつまでたつても新八なんだよ。」

新八「何だところらああああ！！全面的に新八批判かああああ全国の新八にあやま…」

新八の熱弁もむなしく、うるさいと思った木津が持ってたスコップで新八の頭を殴る…

新八「ぐは…ちよつ…木津さ…」

木津「ちよつと静かにしようか」

新八は、その場で気絶した…しかし木津は「なんて言ってるが、目が笑ってない…そのオーラは、まるで鬼神…なんて言ったら木津

が作者の方に睨み付けてきた。

木津「きつちり…書こうか……」

はい！すいませんでした！ちゃんと書きますから、スコップで殴るのはやめて…

木津は、「よろしい。」などといいながら席に座った…

？「先生」。

つといきなり先生を呼ぶ声がした。しかし声の主がわからない。

銀八「誰だ？今、俺呼んだの。」

何度見渡しても声の主がわからない。

銀八「おいつ。今、先生呼んだの誰だ。」

銀八がクラスに問いかけるが、知らない 自分じゃない 俺じやねえよ

私でもないわ 私デモネエヨ…皆の声では、ないようである…

こなた「先生。これはもしかすると…」

銀八「なんだ？」

皆も何を言つか待っている雰囲気である…

こなた「心霊現象では、ないでしょうか！」

シーン…

クラスの雰囲気が一気に冷めたがこなたは、無視してるのか、気づいて無いのか分からないが、こなたは、テンション高めで話を話した。

こなた「だって先生しか聞こえなかったんでしょ？しかも仮に嘘ならこんな時に嘘付く理由もないし…これは、正しく心霊現象ではないでしょうか！！」

皆は『有り得ないだろ』なんて思っていた…

銀八「そ…そうだよなあ…まさか心霊現象なんてわけ、ねえよなあ…」

こなた「先生？声が震えてるよ？」

木津「先生。まさか恐いなんてわけないですよね。」

神楽「いい年してそんなことで怖がってるアルか…ププ（笑）」

近藤「なんだよ。先生お化け嫌いなのかよ…ププ」

新八「……………」（木津のスコップで殴られたため気絶中…）って言うか保健室に運んでやれよ…

そんな作者の言葉もむなしくクラスの皆は、未だに先生をバカにしていた…

銀八「う…うるせえよ…そ…そんなことあるわけねえよ…心霊なん
ているわけねえよ…あ…あれだろ…誰か嘘付いてるんだろ…なあ…
そうだよなあ……」

こなた「先生。私が聞く限りここ付近ではないですよ…クスッ」

長谷川「そうで…ププ…俺の…ハハハ…周りからも…『やべｗｗ』
…聞こえ…『笑いそうｗｗ』…ませんでした…わはははははは」

皆が先生を笑っているとその笑いを遮断させるように何処からか声
が聞こえた…「先生…！」

その声が聞こえたのか、皆が静まり返った…

こなた「今の何？誰が言ったの？」

新八「……………（気絶中）」

木津「私じゃないわよ。」

長谷川「俺でもねえぞ。」

キヤサリン「私デモネエヨ本当二。」

神楽「私でもないアル。」

土方「俺でもねえから…つつかやっと出番かよ…。」

沖田「勿論、俺でもねえでさア。ほれ、桂木、ワンって言うてみや
がれ。」

桂木「ワ…ワン。た…助け…て…。」

近藤「俺でもねえぞ。」

銀八「最低でもてめーらじゃねえってことか…」

クラスの皆では、ないらしい…つと皆が諦めかけていた…

キンコーン…とうとう長くも短いホームルームが終わった…まあ結局呼んだ犯人もわからず新銀魂高校七不思議の一つに追加された

……

この呼んだ犯人の正体も

なぜ呼んだかも真相が分かるのは、また次回の話で……

続こうか…

く2ノ訓く

次回あの声の正体が判明か？

次でるドラクエの最新作は、ドラクエ

く2・5ノ訓く

雨降って、地固まるって言うけど実際は、

皆さん、お久しぶりぶりです。いろいろあつて、忙しくなり、なかなか小説が書けませんでした！

今から、少しずつ投稿しますのでこれからもお願いします！あと、もうひとつ小説を書いたのでぜひ、見てください。

一時間目が始まった。クラスは、相変わらず騒がしかった。

銀八「ぎゃーぎゃーうるせえよ！修学旅行の夜にやる枕投げする中2ですかコノヤロー！！」

新八「先生、例えが微妙過ぎます。」

新八の突っ込みを無視して銀八は、話を始める。

銀八「早速だが今から、緊急アンケートを書いてもらう。」

木津「先生。」

銀八「あ？」

木津「相変わらずなんて服装！なんて髪型！見てるだけでイライラする。」

木津は、そう言いながら、頭を掻きむしった。

銀八「しょうがねえだろ。原作を尊重してるんだから。あと天然パーマだから。この髪型は、さすがにわざとじゃないから。」

こなた「先生。この小説で原作の話をするのは、野暮ですよ。」

木津「とにかく、その姿をきっちりさせない限り話を進ませません。」

銀八「しかしよお……」

すると銀八の頭の上に高速で“何か”が飛んできた。明らかに木津のところからである。

銀八「わ……分かった。ちよつと待て！」

……そして10分後……

銀八「ちつ……これでいいだろ。」

その姿は、銀八らしくない格好であつた。天然パーマであつた髪は、ストリートになつていて、だらしなかつた服装は、きちんとしたものになつていた。まあ服装は、創造にお任せしまうす。

神楽「ぶっ……ぶはははははははははは。」「

こなた「ちよっ…笑いすぎだつてば神楽ちゃん…きゃはははははは」

長谷川「おいおい……ブブブ……そんなに笑うなよ……ぼげええええププ」

キャサリン「フンッ。ゼンゼン笑エネジャネエカ。……バザアプ
プ。」

近藤「おいおいそりゃねえぜ先生……ぶりっプ」

沖田「近藤さん笑いすぎでさあ……土方死ねこらププ」

土方「おい。なにさりげに俺を亡き者にしようとしてるんだよ……」

沖田「こそ死ねププ」

沖田「土方こそ死ねププ。」

土方「沖田こそ死ねププ」

沖田「沖田こそ死ねププ。……あつ間違えた。土方こそ死ねププ」

一人は、笑い吐きしてしまい一人は、笑い漏らしするしとにかく笑いが止まらなくなっている。

そしてこの発端になった本人からも「まあ……いいんじゃないですか……ププ」とからかわれていたかのような発言をされた。

銀八「ギャーギャーうるせえよ。浦島太郎で亀を虐めるガキたちがコノヤロー。」

銀八の言葉で一先ず静まり帰った。

銀八「何だよ。何処がいけねえんだよ！俺なりに頑張ったんだぞ！」

……いきなりの逆ギレである。

新八「先生。ちょっと落ち着きましょうよ。」

銀八「何だよ。こっちは、イラついてるんだよ。ダメガネール三世」

新八「ダメガネガール三世って誰だよ！！しかも自分に八つ当たりしないで下さいよ！！」

銀八「ンだと？てめえから話かけてきたじゃねえかよ。怪人ダメガ

ネス。
」

新八「何だよ！！怪人ダメガネスって！！つかダメガネじゃないからね！新八だから！！」

新八と銀八が言い争っていると、何処からか、スコップらしきものが降ってきた。犯人は、言うまでもなく木津である。

木津「早く内容に入ってください。」

銀八は、ゴホン。と咳払いをしながら本題に入った。

銀八「早速だが今から、アンケートを取ってもらう。」

……続きます。ごめんなさい

く2・5ノ訓く

雨降って、地固まるって言っけど実際は、

次回こそ、正体が……解るかな？

く3ノ訓く

陰と陽は、一重なり（前書き）

皆さん、更新遅れてすいませんでした！！何とか書いていきますので何か感想などがありましたらどうかよろしくお願いいたします！！（・・・）

それは、数日前に遡る。銀八は、いつものように校長に呼び出されていた。

銀八「…で、何のようっすか。」

銀八はそう言いながら、出前で取った寿司を食っていた。

校長「あのさあ、いい加減自覚してほしいんだけどさあ…ここ校長室だから、もうちょつと礼儀を正してほしいんだけど…」

銀八「べ？はひふつてひふのは、はかふへほ（略）え？何言ってるか解らねえよ。潰れた餡まん見たいな顔しやがって…そんなにてめえが偉いと思ってるのかよ。こつちだつて昨日から何も食ってねえんだよ！！時々は、こんなに食いたい時もあらあ…それを邪魔しやがって……）」

校長「いや！聞こえてるじゃん。しかも、そのあふあふ言葉にどれだけの意味があんの？つうか校長が偉いのは、当たり前じゃ！」

教頭「早く、辞職してほしいがな。」

校長「おい！いい加減にしろよ、クソ爺。わしは、まだまだ辞めんぞ！というかこの小説が銀魂高校という世界にいるかぎり、校長がわし以外になることは、ないんじゃないよ。ほほほ…」

何故か高笑いをしている校長に呆れたのか、銀八がわさびを持って、校長の口の中に、無理矢理、押し込んだ。校長は、「な…なにする

んじ……ぶばっ…や…やめ…ぶばあああああああああ。
「
という断末魔とともに倒れていった。

銀八「つで、俺に何のようっすか？ミスター魔神ブウ。」

校長「人の口にワサビを無理矢理入れといて、謝るきなし？あと校長だから、もはや〜長とかいうボケじゃなくなってるよね。」

校長は、少しイラつきながら咳払いをして、「実は」と話してきた。

校長「3年Z組にあるアンケートを取ってもらっ。」

銀八「アンケート？何の？」

校長「…やっぱり思ってた通りじゃ。」

銀八「どういうことですか？」

校長「その調子だと忘れておるな。この前、アンケートを出すように言っておいたのを覚えておるか？」

銀八「ああ…あん時、あんたが何か言っていたと思ったたらそのことだったんすか。てつきり、『この紙束を捨てたら、ご褒美に給料20%UPじゃ。』て言ってるのかと思ってたわ。」

校長「何処をどうしたら、そんな風に聞こえるのか知りたいもんじやな。」

銀八「いやあ〜それほどでもありますよね〜。」

校長「褒めとらん。と本気で突っ込むと思ったか。話を進めるぞ。」

教頭「けっ。ブウの癖にべらべら喋りやがって…。」

校長「おいジジイ、いい加減にしろよ。超かめはめ波を撃ってやるか？今なら、撃てるぞ？撃てそうな気がするよ？殺ってやるのか？」

さすがに、切れたのか、校長の頭のアナログスティックを痛恨の一撃で引き抜いた。

校長の断末魔が、再び学校中に響いたのは、無理はないことである。

銀八「…と言うことだ。」

つと言いながら、面倒くさそうに、アンケートのプリントを配ろうとしていた。

近藤「ちよつと待つてください先生！」

銀八「どうした？野生にでも帰りたくなつたのか？」

近藤「違いますよ！なんで国語を潰してまでアンケートをしなければいけないんですか？」

銀八「あっ？いいじゃねえか、別に。」

近藤「だって今日、詩の発表会だったじゃないですか！せつかくこの日の為に、夜寝ないで、作つたと思ってるんですか！」

銀八「分かった…分かったから、お前だけ特別に詩を令、聞いてやるから。」

近藤「マジッスか!？」

近藤は、テンションが上がったのか、いきなり机の上に乗って、詩を読み始めた。

近藤「では、この近藤 勲
読ませて頂きます!!」

題名：ああお妙さん
お妙さん

その美しい笑顔は、まるで
太陽を浴びて輝いている
白鳥のようだ。

そんなお妙さんを色に例えると純粋なピンクだ。
そしてお妙さんと僕を例えるならば、ポニョとソウスケのかん…

気持ち良く読んでいる近藤の所に、猛スピードで“何かが”飛んできた。

近藤は、“何か”に気付いたが、時すでに遅く、近藤の頭にクリテイカルヒットした。近藤は、「がふっ!!」沖田は、「へいへい」と叫びながら、倒れていった。犯人は、勿論、志村 妙である。

妙「そんな頭の悪そうなゴリラが書いた詩なんて読まれたら、吐き気どころか頭にカバンが堕ちてきて、頭に直撃するぐらいのショックだわ。」

近藤「いや…さっき、妙さん…が実現させ…たじゃ…ないです…か

…」

近藤は、薄れゆく意識の中で言いながら、倒れた。土方が「はあ…」
とため息をつきながら「早く保健室に連れてけ。」とジミーこと山
崎 退とDSこと沖田 総悟（奴隷付き）に言った。

沖田「俺の代わりにこの奴隷7号がやるらしいでさあ…なっ、奴隷
7号？」

桂木「（転校したい…（涙））へ…へい…。」

土方「はあ…。総悟、お前が行くんだ。」

沖田は、「へいへい」と言いながら、ジミー（山崎）と近藤を運
んでいった。

銀八「今のは、ほっというアンケート配るぞあ。」

こなた「先生？このアンケート、この時間に集めるんですか？」

銀八「まあ校長が言うには、明日の放課後までらしいから…なるべ
く明日の放課後までには、書いて出せばいいんじゃないかね？」

こなた「先生、もうちょっと先生としての責任を持ちましょうよ。」

木津「そうですよ。きちんと先生らしくして下さい！」

銀八「わっ…た…。じゃあ一応、今日の放課後までには、出しとく
ように。」

そして1時間目のチャイムがなった…

続く…といいなあ

ゝ3ノ訓ゝ

陰と陽は、一重なり（後書き）

次回は、やっとZ組のクラス全員が分かります！！…たぶん（涙）

〈第4ノ訓〉 絶望なんて所詮、その人の感情しだい（前書き）

すいませんでした。なかなか投稿出来なくて…少しいい加減になつてゐるかもしれないですけど見てくれればなあと思います。

〈第4ノ訓〉 絶望なんて所詮、その人の感情しだい

〈放課後〉

銀八は、職員室の中にいた。相変わらず、自分の席でジャンプを読んでいた。

銀八「まだ、ギンタマンやってんのかよ。いい加減、打ち切りになりやいいのによ。」

銀八が、ジャンプに愚痴を言っていると、後ろから銀八を呼ぶ声が聴こえた。銀八が振り向くとそこには、ある人が立っていた。

銀八「あ…隣のクラスの絶望先生じゃないっすか。」

糸色 望「絶望って言うなああああああ。」

糸色の叫びが学校中に響いた。

〈絶望なんて所詮、その人の感情しだい〉

銀八「っで何のご用すか？」

銀八は、望の叫びを無視しながら聞いた。

絶望「あ…実は、（銀八）先生のクラスのアンケートを見通したんですけど…。」

銀八「なんであんたが見通してるの？」

絶望「私は、アンケートの徴収係だったんですよ…。でいくら（銀八）先生にアンケート出してと言っていたのに、全然聞かなかったじゃないですか!!」

銀八「え？あゝ…あれそういう内容だったんですか…。てつきり『いつ死ぬか分からないから遺産を分けてやろう。』って言っていたような気がしてたと思ったけど違ったわ。」

絶望「なんであなたに遺産を遣らなければいけないんですか!!…まあそれでああなたのクラスのアンケートの内容があまりにも酷いから今から、直してもらいたいんですけど。」

銀八「なんだ？そんなに内容が酷かったのか？」

絶望「…担任なのに中身見てないんですか!!」

銀八「だってジャンプ読みたかったんだからしかたないじゃないすつか。」

絶望「それでも先生ですか!!」

銀八「四六時中、心中の準備してる人に言われたくねえんですけど。」

絶望「死んでやるうううううううううううううう!!!!」

どうも銀八に痛いところ突かれたらしく、絶叫しながら職員室を出ていった。

？「そんな事、言ってられるんですか？（銀八）先生。」

後ろから、少し怒りぎみで聞こえてきた。声の主は、遙か彼方にある、幻想郷出身で銀八と同じ、国語担当である上白沢慧音である。

銀八「まあさっきの絶望先生の話を聞く限り、ようは、アンケートをやり直せっていうことっすか。」

慧音「そういうことです。というか何で、生徒さんのアンケートを見なかったんですか？」

銀八「だからジャンプを読み…」

銀八が言い訳を言おうとしたとき、いきなり銀八の両肩を掴んだ。顔は、笑っているが目は、殺気と狂気と怒りが表れていた。

慧音「…（銀八）先生？そんな理由で通ると思ってるんですか？」

銀八「いやあ……ほら、ジャンプって勉強になるとこあるじゃないですか。例えば……熱い戦いとか固い友情とか……」

慧音「言い訳はいいです！ちょっとこれは、覚悟を決めてもらわないといけない見たいですねえ……」

銀八「いやね、ほら……あれだよ……ジャンプもある意味、国語の勉強になん……」

銀八は、言い訳するが全部、流されて慧音は銀八にいきいよく、頭突きをした。

アベシッ

銀八の断末魔が響き渡った。

銀八「け…。何で俺がアンケート書き直すためにあのバカどもの家、回らなきゃいけないんだ…。」

慧音「うるさい！！とにかく書き直すまで今日は、寝かせませんよ！！！！」

こうして銀八と慧音のアンケート書き直しの旅が始まったのであった…

続けない…なんちって

〈第4ノ訓〉 絶望なんて所詮、その人の感情しだい（後書き）

次回は、3年Z組の生徒訪問します!!

〈第5ノ訓〉

多数のキャラ出演に崩壊は、つきま

また長くなってしまいました。体育の日に誕生日になりました
：17歳になりこれからもっと時間が掛かるかも知れませんがこれ
からもよろしくお願いいたします。これから、なるべく早く書いて
いきたいと思ひます。

〈第5ノ訓〉

多数のキャラ出演に崩壊は、つきま

ナレーサン「前回の話…。謎の組織、銀魂高校からの命令である極秘書類を渡すことになった銀八こと坂田銀八と頭でつかちこと慧音が最終目的であるガンダーラ・ブホテルに向かって旅立つのであった。」

慧音「先生（銀八）…何言っているんですか…。」

ナレーサン「何って、分からない人のための前回についてあらずじを語ってたんすよ。」

慧音「勝手に改蔵…じゃなくて勝手に改造しないでくださいよ！！最初にこれ読んだ人が勘違いするじゃないですか！！しかもガンダーラ・ブホテルって完全にイヤらしいホテルを誤魔化してるし！！あとナレーサンって誰ですか！！！」

銀八「まずは、新八の家から行くか。」

慧音「無視ですか！！！」

〈第6ノ訓〉

多数のキャラ出演に崩壊は、つきもの…と言い訳してみる

今、銀八とキモケー…慧音とあのアンケートの書き直しのため、クラスの生徒たちの家を周っているのだった。

慧音「（銀八）先生？一ついいですか？」

銀八「ん？まだナレーサンのこと引きずっているんですか？そこま
で知りたいなら“銀魂”の二八巻を見ればいいじゃないっすか。」

慧音「さりげなく宣伝しないでください！！もうナレーサンのこと
じゃなくて…今から行く“新八くん”の家ですよ。」

銀八「なんか不満でもあるんすか？」

慧音「授業で見る限り、真面目だし変なこと書くような人じゃない
ような気がするんですけど…。」

銀八「まあうちのクラスの中では、真面目な方だが…というかあん
たは、アンケート見たわけじゃないすか。」

慧音「いや…一応全部見たつもりだったんだけどその名前が書いた
アンケートは、見たことないような…」

銀八「まあ新八だからしかたないんじゃないっすかあゝ。あいつメ
ガジミーシンパトロソって呼ばれるぐらいだし。」

慧音「なんですかそれ…。」

銀八「人間からメガネにトランスフォームすることができて、自分
自身を色んな意味で空気と一体になる能力があるんすよ。」

慧音「へへ。地元にも変わった人多かったけどそんなことできる人
間がいるなんて聞いたことないですよ。」

銀八「あとあらゆる物に突っ込みをいれるという必殺技もできるん
すよ、あいつは。」

慧音「へえ。それはすごい人がいるもんですね。まああの学校にまともな人がいるかどうかもわかりませんけど…」

銀八「お、着いたみてーだ。」

銀八の目の前には、少し大きいぐらいの古めかしい木で造られた門があつた。

慧音「『恒道館道場』…ここがあなたの生徒さんの家ですか？」

銀八「けっ…。インターホンねえのかよ…。大声だすのも面倒くせえから勝手にお邪魔させていただくと思いますかあ。」

慧音「ちよつとまつ…？」

勝手に入ろうとした銀八を止めようとした時、門の向こう側から謎の警報音が鳴った。

警報「シンニユウシャハツケン！シンニユウシャハツケン！」

銀八が「え？」と言った瞬間、門が突然閉まつた。銀八が運悪く、脱出できず閉じ込め（勝手に家に入ろうとした銀八も悪いが）られた。

慧音は運よく、門が閉まる前に凄く速さでぎりぎり銀八見たいに閉じ込められずに済んだ。

慧音「なんなの一体…。って（銀八）先生ー！！大丈夫ですかー！！」

銀八「は？何が起きてんだ？」

すると奥から何か聞こえてきた。

警報音「ストーカー破壊マシン発動シマス。」

警報音が言葉を発した瞬間、道場というか土地全体から何かがトランスフォームするような音がし、『グイーン』だの『ガッチャーン』などのいかにも何かしらの機械というか兵器というかそんな感じの音が銀八の耳に聞こえた。

銀八「ま…待てよ…お…俺は、あのゴリラのストーカーじゃねから…つかあいつら（志村新八・志村妙）道場の復興とかアンケートに書いてたが復興どころか、完全に要塞基地になってるじゃねえか！！近藤の奴^{ゴリラストーカー}どんな風にストーカーしたらこんな要塞作らせられるんだよ！！」

そんな銀八のストーカーに対する文句と要塞に突っ込みも虚しく、どどん道場が要塞化していつている。

慧音「（銀八）先生！！大丈夫ですか！！今、助けに行きますから！！」

銀八「来るんじゃないえ！！」

銀八が叫んだ。その叫びは、さっきまで適当でちゃんぽらんでやる気のないあの銀八が出したとは、思えないような芯が通っていて魂はふれる声だった。

銀八「これは元々、俺の問題だ。てめえー（自分）の問題ぐらいは、

てめえー（自分）で解決してみせらあ。」

慧音は、『じゃあ最初からきっちりやっていればこんな目に会わなかったんじゃないの？』と突っ込もうとしたが、予想外の叫びに突っ込む空気になれず何故かその言葉を受け止めてしまった。

慧音「…分かりました……。あとは、任せましたよ、（銀八）先生。」

慧音は、まるで命懸けの戦いに無理をしながらでも決着を着ける主人公を止めようとするも、中々言うことを聞かずに結局は、主人公を信じ、かならず帰ってくると願いながら言葉を放つヒロイン見たいに言った。

向こうから銀八の叫び声が聞こえてくるも銀八の言葉を信じて助けなかった。すると後ろから声が聞こえた。

新八「あれ？慧音先生じゃないですか…ってなんか家からすごい爆発音が聞こえてくるんですけど…！」

慧音「新八くん？！中に銀八先生が入っているんだ。早く止めないと…！」

新八「先生があ？！なんで…。確か門の鍵は、閉まってたはずなんですけど…。」

慧音「普通に開いたわよ？鍵のかけ忘れとかないの？」

新八「確か最後は、姉上が出ていったような…。」

慧音「じゃあ新八くんのお姉さんは、どこにいるの？早く見つけてだして銀八先生を助けないと！！」

新八「けど姉上は今、バイトしてるんです。しかも結構距離があるから姉上に会うところには、銀八先生が生きてるかどうかな……」

慧音「兎に角、助けないと……私が門を壊しとくから新八くんは、誰か力強い人呼んできて！！」

新八「分かりました！なるべく早く呼んできますから頑張ってください！！」

新八は、その言葉を言うと、慧音を見ながら走っていった。………
…一方、銀八は…

銀八「ぎゃあああああああ！！ヘルプ！ヘルプミー！！！！」

あのかっこいい台詞を言った後とは、思えないほどのダサさである。当然といえば、当然である。上からは、タライやレーザーが降ってくるわ、草むらには、ブービートラップが仕掛けてあったり、いつの間にか地面には、地雷が仕掛けてあったりなど色々な罠？がそこら辺とあるためとにかく避ける・逃げるしか方法がないのだ。

銀八「つつかあいつらは、どこいんだよ！！何処探してもいねえじやねえか！！……ていうかなんでアンケートの書き直しさせるだけでこんなに命懸けなきゃいけねえんだよ！！（怒り）」

銀八が何とか逃げていると、誰か落とし穴に引っ掛かったような跡があった。しかもそこから聞き覚えのある声聞こえてきた。

近藤「フハハハは。妙さん！甘いですよ！！絶対に出不らないということは裏を返せば、妙さんと俺の絶対不可侵領域の愛の巣ができるということ！…そうだ…勲！ポジティブに考えろ！この状態で一瞬でもネガティブな事を考えてみる勲！！あのハーゲンダッツの二の舞勲ー！！」

銀八「てめえも来てたのかよ！！よくこんな所にずっとこれるよなあ！！もう諦めろ！諦めてゴリラと付き合え！」

近藤「嫌だ！！俺は、妙さんがいい」。この思いを例えると妙さんを妖精とすると自分は、ピーターパンさ！」

銀八「てめえは、こんな状況でよく呑気に例え話出来るなあ！言つとくがこの要塞並みの罠は、全部てめえのせいだからな！！（こんな事になるなら、最初カツコつけんじゃなかったぜ…。）」

一方、慧音側の方は…

続きは、次回で…

銀八「作者ふざけるなあああああ！！早く…早く俺を…助けてくれええええええええええ！！！！！！」

〈第5ノ訓〉

多数のキャラ出演に崩壊は、つきま

銀八の運命は、いかに…。

何か感想等が合ったらどんどん書いていってください

ゝ6ノ訓ゝ 急展開は憑き物（前書き）

本当にすいませんでした！中々書く暇がなくて気付いたら年明けでした…。今度こそはなるべく早く投稿したいものです。これからもよかったですらよろしく願いいたします。

く6ノ訓く 急展開は憑き物

いきなりだが一方、慧音は…

慧音「（銀八）先生は、助けるなって言ってたけど流石に15分経ってるし、中から爆発音聞こえるし周りも流石に騒がしくなってるし…。」

新八の家の門前には、爆発音を聞いて野次馬が集まってきた。という騒がしくするほど家を改造するなって話だけど…と慧音は、考えていた。しかし今、中にいる銀八たちを助けなきゃいけないことが懸命なため、ありゃこや考えてる場合ではないのだ！どうする！慧音！！

慧音「なんか作者のナレーションが他人を馬鹿にしているようにしか聞こえないんだけど…まあそれはとにかく、私だけじゃ流石に助けられないみたい…。だからといって野次馬してる人達は、怖くて手が出せない状態だしなあ…応援が来るまでやれるとこまでしてみよう。」

すると後ろから先生を呼ぶ声がした。

？「あれ？先生、何やってんの。」

慧音「あなたは…マダオくん！！」

マダオ「いや！マダオじゃないからね！！長谷川だからね！つつか」「の前の名前もマダオになってるし。この世界の設定じゃ、高校生だからね一応！」

マダオ」「毎日、ダラダラして一人で押しくらまんじゅうしてるあわれな奴。」の略なのだ！！

長谷川「ナレーションがとてつもなくイラつくけど！！一人で押しくらまんじゅうしてねえし！そんなことしてるのこの作者さんぐらいだし！！…じゃなくてあの、先生どうしたんですかって聞いてるんですよ！！」

慧音「ちよつとね…訳は、後で話しますから今は、中にいる銀八先生を助けるのを手伝ってほしいんです！」

長谷川「何か知らないが手伝いたいのは、やまやまなんですけどね。」

慧音「？何か用事でもあるの？」

長谷川「バイト探して忙しいんですよ。だから今日は、勘弁して…」

慧音「今すぐに助けに行ってくださいね。」

語尾に を付けているが、慧音のオーラは、空気読んで助けるオーラが出ていて、頭から立派な角が竹の子見たいに出てきた。長谷川は悟ったのか、大人しく「はい！今すぐ手伝います！！だから許して下さい…」と張り切りというか脅迫に脅されて仕方なく言ったというかの言葉であった。

慧音「長谷川くんは、裏に回って入れる場所を探して中の様子を見に行つて！！」

長谷川「え？それって中に入れる場所があつたら入っていけつて言
つてるように気がするんですけど…」

慧音「そう言ってるでしょ！！」

長谷川「俺を殺す気い？！ふざけんじゃねえよ！確かに（銀八）先
生を心配るけど自分の命を捨ててまで助けたく…」

慧音「今、ここで私の角の餌食になってもがき苦しんで死ぬのと銀
八先生を助けに行つて少しでも生存率を高めるのとどっちがいいか
しら？」

長谷川「行つてきまーーす！」

その時の長谷川の顔は、三途の川に着いてしまつて死ぬ覚悟という
より、もう死んだなという絶望している顔だったという。by 慧音
慧音「まずは一人と…。あれ？野次馬がいなくなった…。やっぱさっ
き、頭から角出すんじゃないかなかったかなあ。まあちよつと作業しやす
くなつて良かったけど。」

慧音は、少し落ち着いた様子で言つた。相変わらず銀八の悲鳴が聞
こえてくるが…。すると後ろから先生を呼ぶ声がした。

？「せんせーい！新八くんから銀八先生が危ないと聞いたんで！！」

慧音「あなたは…ジミーくん？」

ジミー「山崎です！山崎退

です！何ですジミーって！地味か！地味だからか？！」

慧音「兎に角、銀八先生を助けないと。ジミーくんは、多分地味だから中の罠には引つ掛かっても気付かれないでしょ。」

山崎「入ってか！！入っていつてるよねえそれ！！」

慧音「大丈夫よ、ジミーくん！！あなたの地味さだったらきつと罠にはかからないはずよ！」

山崎「なんのフォローにもなってないですよ！！地味だから罠にも見放されるのが俺は！！」

慧音「貴方のクラスの先生と地味…どっちが大切なの？」

山崎「わ…分かりましたよ……。行けばいいんですよ…あと角が出てきてるんで隠して下さい先生…恐いですから……。」

山崎も長谷川同様、裏から回って助けるルートに出た。…長谷川は泣きながら中に入ろうとしてるが…逃げたら殺されそうな勢いだっただから逃げたくても逃げられないらしいのだが…

長谷川と山崎が銀八先生を助けようと涙ながらに中に入ろうとしている中、慧音の後ろからまた声が聞こえた。

？「志村弟から呼ばれてきたが凄いことになってんなあ。」

？「そうですねえ。まああんな風になってんのは、大方近藤さんのせいだと思いますぜえ。土方さ〜ん。あと奴隷242号」

？「んーんーんー（これが風紀委員のやることか！って言えねー。つつか周りの人達、なぜ声を掛けない！！助けてー。）」

どうも声の主は、土方と沖田＋奴隸（桂木）らしい。

慧音「あなたたちも風紀委員の人たちね。…一人奴隸にされてるけど……。まあいいわ、とにかく銀八先生を助けるの手伝ってくれないかしら。」

土方「しかし…助けようにもあの爆発音が鳴り響いてる限り入る気がしないんですけど。先生」

沖田「まったくでさあ。というかこういうのは、俺たちより警察に任した方がいいんじゃないですかい？先生。」

慧音「実はマダオくとジミーくんが家の裏側で入れる場所探しに行かせた後、警察署に電話してみたけどなんか別の所で事件が起きてるらしくて人手が少ないらしいから少し時間が掛かるって言って切っちゃったから何とか警察の人たちが来るまで私達で何とかしましょう。」

沖田「じゃあ警察が来るまで大人しくしてたらいいんじゃないですかい？」

土方「てめえよくこの爆発音で冷静にいられるなあ総悟。まあ仮にもうちの担任だしな。しかもここで先生を助ければ少なからず風紀委員の評判も良くなる。…よし総悟、そういうことだから現場調査に行つてこい。」

沖田「そりゃねえですよ土方さん。どっちかと言うと俺なんかより副風紀委員長の土方さんの方が評判上がりやすいんじゃないんですかい。ということで土方さん…よろしく。」

土方「ちょっと待て総悟。本当だったら俺がやってもいいが今回は、ゆずってやるから…実は上司より部下が活躍したほうが評判良くなるらしい。つうわけで後は頼んだぞ…総悟。」

いやいや土方さんが…。いやいや総悟が…などと言い争っている内に隙について奴隷242号（桂木）が逃げようとするにも沖田は気付いたのか首に巻かれてある首輪（ヒモが鎖）を素早く取った。

沖田「おっと。土方さんのせいで奴隷242号を逃がすところだったじゃないですか…。ここは、間をとって奴隷242号に逝かせればいいんじゃないですかい？」

桂木「んゝ。んゝゝ（無理に決まってるじゃん！！人を殺す気?! それでも風紀委員なの?!）」

沖田「この女の悲鳴は、ドSの身としては、かなり興奮するんです。あ。しかも運よかったら中にいる先生も助けられてもしかしたら何だかんだで俺たち風紀委員の評判も上がって土方さんも死ぬことにより二石三鳥になったらいいなあ。」

土方「ただの願望かよ！大体なんで最終的に俺が死ぬことになってんだよ!!!…しかしてめえの奴隷とやらに行かせる案は、結構いいかもなあ。」

桂木「んゝ。んゝんゝゝ。（何でそこに賛成なんだー！ていうかあなた（土方）も実はドSだったのかあああつ。）」

沖田と土方が桂木を犠牲にする作戦を決定しようとした瞬間、新八の家の家が突然静かになった…

慧音「爆発音が止まった…。何があったのかしら…」

⋮
続く

ゝ6ノ訓ゝ 急展開は憑き物（後書き）

次回、爆発が消えた理由と銀八の運命はいかに。

く7ノ訓く 爆発ネタのアフロ度は以上。

……。突然、あれほど騒がしかった爆発音が止んだ。当然のごとく皆、（。口。）ポカーンである。

慧音「止んだ…みたいね。」

慧音の一言で静まった雰囲気が無くなった。

沖田「どうします？土方さん、中を確認しますかい？」

土方「油断は、禁物だぞ総悟。また爆発する可能性が高いからなあ。…ま、あとは警察が来るまで現場を維持させねえと。」

すると後ろから、パトカーのサイレンが聞こえてきた。

慧音「あ…。警察の方達が来たみたいね。」

慧音がひとまず安心してしていると、パトカーから声が聞こえてきた。

？「ここが現場らしいなあ。ハジ！現場に向かうぞ。」

ハジ「はいでやんす！-！」

パトカーから出てきたのは、イカにも…じゃなくていかにもハード

ボイルドな姿、形、オーラをしていて慧音は、頼もしい方が来てくれた！！っと一安心していた。慧音は、小銭形平次に今までの状況を話した。

慧音「……ということで敷地には入れない 中に教師がいる 私と生徒さん達が何とか頑張ったが結果オウ……という状況だったんです。何とか中に閉じ込められてる彼（銀八）を助けたいんですけどねえ……」

小銭形「まあ後は俺たち警察の仕事だ。安心してれ。」

慧音「ちなみに現場に来ているの小銭形さんとハジさんだけなんですか？もうちょっと人がいたほうがいいんじゃないですか？ほら、あと小銭形さん爆弾処理班ですよ？爆弾処理班なら特殊車輛とか必要と思うんですが……」

慧音が不安そうに言う

小銭形「ああ、ちょっと大事な用事ででていてなあ。」

慧音「なんか大変な事件でも？！」

小銭形「いや、『月刊特殊車輛特別号』という雑誌のグラビア撮影に駆り出されていて、一台も残っていない。」

慧音「突っ込み所多すぎだろ！？」

慧音が大声で突っ込んだ。

慧音「ていうか、あなたも爆弾処理班なら一台ぐらい持ってきて下

「さいよ!!」

小銭形『本当は特別号ともあつて張り切つて行きたがつたが、相変わらず班でハブられている俺は、参加出来なかつた…。まあ黙つていればこいつらには、解らないことだが…。』

慧音「丸々、聴こえてますよ!!何、ハードボイルド風に喋つてるんですか!!!」

慧音が小銭形に頭突きをしようと構えてるのを見て、土方が慧音を止めにいった

土方「先生。今さらだが兎に角、中にいる（銀八）先生と近藤さんを助ける事を優先した方がいいと俺は思います…。」

慧音「それもそうね…。小銭形さん。なんかいい方法ないですか？」

小銭形「なんとも言えないな…。一旦、BARに行つて作戦を立てよう。」

土方「BARなんてねえよ。」

小銭形「じゃあここの学食をBARにしよう。さつきチラツと見たらなんかBARぽかつた。」

土方「似てねえよ!どんだけBARに行きたいんだあんたは!!」

小銭形『BARは、俺の心を潤してくれる唯一の場所だ…。まあこいつらには解らないだろうが…。プツ（笑）。』

土方「こいつ全然ハードボイルドじゃねえよ！すっげえ腹立つんだけど！！」

土方が突っ込みを入れた時点で我慢が出来なかったのか、慧音から角が出て突進の準備をしていた。

慧音「あなた…爆弾処理班ですよね？」

その言葉を発した瞬間、小銭形目掛けて突進しはじめた。

慧音「なら…」ドグッ！

慧音「自力でも助けんかいいいいいいいつ！！」

突進された小銭形は「ぎゃややややっ！」と叫びながら上空を舞い、屋敷の中に入っていた。

慧音は、「はっ！」と我に帰り自我を押さえられなかったことに後悔した。

慧音「しまった！…屋敷に衝撃を…。」

しかし屋敷は、何も反応しない。皆が不思議に思っていると後ろから声が聴こえてきた。新八の声である。

新八「慧音先生ー！。」

慧音「新八くん！遅かったぞ。」

新八「すいません。丁度、姉上が帰ってきた所を見つけたんで連

れて行こうとしてたんですけど…。」

慧音「ん？まあ理由は、いい。君の姉上はどこにいるんだ？」

妙「呼びました？」

何故か慧音の後ろにいて、妙の声に一瞬、驚いた慧音だった。

慧音「びっくりしたあ…。じゃなくて志村妙さんで名前合ってますか。」

妙「そうですけど？あ、話は、新ちゃんから聴いてます。うっかり鍵を閉め忘れてたみたいですから。」

そう言うとは、ポケットから鍵を出し玄関の扉を開けた。中は、殺伐としていた…。包丁やナイフ、バズーカまでぶら下がっていてそこかしらに地雷の爆発した後がある。

因みに長谷川とジミーが戻ってきたころには、誰も居なかったという。あ、一人忘れてたみたいだがもういいや。

桂木「ふがー（結局、放置かよ！！）」

銀八「けっ…。なんでこんな目に逢わなきゃいけないんだよ…。いたた」

慧音「自業自得だと思いますが…。まあ良いです。次、行きますよ。」

銀八は、「へいへい。」と適当な返事をしながら次の場所へ向かつ

た。

余談だがなぜ途中で爆発が収まったかというところ、志村家の屋敷の防衛システムは、志村妙が3キロか4キロぐらい近づくと一時停止するという機能が付いてるのだ…。どうみても後付け設定ですありry

く9ノ訓く家族の思い出（前書き）

すいません！！自分の過ちで第1話を消してしまいました…本当にすいません…。お詫びに何か希望で出したいキャラなどがいましたら出来るだけ登場させます…感想なども受け付けておりますので…本当にすいませんでした。

く9ノ訓く家族の思い出

何だかんだで志村新八、志村妙、そして土方、沖田、長谷川、ジミ
ー（山崎）、奴隸（桂木）にアンケートを書き直させ、次の場所に
向かう銀八、慧音。

慧音「（銀八）先生。次は、何処に行かれるんですか？」

銀八「ん？ああ…次は、泉家に向かつてるみたいす。」

慧音「向かつてるみたいって…。もうちょっと行動に責任持つても
らいたいですね。」

慧音は少し溜め息をついた。

慧音「しかしあの爆発でよく死にませんでしたねえ。頭がパーマか
らレベルアップしたぐらいで。」

銀八「おいおい。そんな嬉しくないレベルアップ嫌だわ。というか
髪型変わるならストレートになってほしかったぜ…。」

慧音「爆発ではストレートにならんだろう。禿げにならなくて良か
ったと思え。」

銀八「爆発で禿げになるほうが不自然だわ！なんか喋り方変わった
？変わったよね？つうか今の素だよね？なんで素がでたの？」

慧音「そこまでいい加減なら素がでても仕方無いだろ…。まあこの
話し方は、生徒にしかないから。」

銀八「え？じゃあ俺ってあいつらと一緒に扱いなの？」

慧音「そこまでいい加減で目が死んでて天然パーマで職員室でジャンプ読んでいて授業も真面目にしない奴に敬語で話す意味がわからないと今回の件で改めて解ったからな。」

銀八「え？そこまで俺って悪い印象しかねえのかよ…。つうか天然パーマ関係ねえだろ！！」

慧音「しかしこんな奴が教師なのによくクラス崩壊しないなあ。」

銀八「まあ自分で言うのもアレだが俺以上にあいつら変だからな。」

慧音「そうか？今日の一件でも思ったが君のクラスの生徒さん、真面目…あ、例外もいたが…。」

銀八「でしょ？ていうかあの中に真面目な奴っていたっけ？」

慧音「たしか土方くんとか新八くんとかあと…ジミーちゃんと長谷川くんもだったような…。」

銀八「……。」

銀八は、何かを考え始めた。

慧音「？」

銀八「……。」

銀八が閃いたようだ。

銀八「慧音先生よあ…。一回、内のクラスの担任を1日体験した方がいいんじゃないか？」

慧音「それもそうだな…。自分の目で確かめなければこつちも色々言えないからな。是非そうしようではないか。」

銀八「あいつら見たら俺なんて小さな黒板のチョークのカスに見えるぜ。」

慧音「そこまで自信満々に言われても…。まあ噂には聞いてるし、もし（銀八）先生が言ってることが本当であっても私が全力を出してZ組のイメージを変えさせようではないか。」

銀八「そんな上手くいくかねえ…。あ、なんかいつの間にか着いたみたいすわ。」

慧音「……。 （しかしこんな先生でよくZ組は崩壊しないなあ…。何でだ？） 」

そして二人は泉家についた…。

ピンポン…泉家の玄関のインターホンを鳴らした。

？「はい。どなたですか？」

慧音「すいませーん。銀魂高校の慧音ですけど泉こなたさんいらっしゃいますかー。」

？「私ですけど、どうしたんですか？」

慧音「前、書いたアンケートをある銀髪天パ教師のミスで書き直しをさせてとこだ。」

こなた「え〜。せっかく今日は出掛けようとしてたのに…。まあいいや。」

慧音「すまないな。…ほらあなたが原因なんだから一言謝って。」

銀八「まあなんだ…。すまねえな。」

こなた「まあまあ。先生が謝るなんて合わないよ。とにかくここじやなんだし家に入ってよ。」

慧音「別に長居するわけじゃないんだ。」

銀八「それじゃお邪魔しま〜すルメイカ。」

慧音「おい。貴様何、お邪魔しようとしてるんだ？」

銀八「まあ人の親切無駄にするのもなあと思ひまして。」

慧音「…お前には、遠慮という言葉はないのか？」

銀八「まあまあ。とにかくここじゃ書くものもなんだしな。中に入って考えたほうがいいんじゃないっすか？」

慧音「それお前が言う台詞じゃねえだろ！！」バキッ

銀八に頭突きを食らわせ銀八が「グハッ！」と言いながら倒れかけ

たが痛さに慣れたか気絶はしなかった。

銀八「けっ…そう簡単にやられるかってんだ…」

慧音「なら次は角出して頭突きだな。」

銀八「すいませんでした。」

こなた「ハハハッ。相変わらずだね（銀八）先生。まあいいから入っててよ。玄関じゃゆつくりできないからさ。」

慧音「そこまで言うなら…。失礼させて頂こうかな。」

銀八「じゃあ改めてお邪魔しま〜」。

慧音「お前は人に対する遠慮と言う言葉を憶えろ！！」グガッバキッ

その日、泉家から悲鳴がでたという…。

（泉家の家の中）

慧音「なんだかすまないねえ。」

こなた「いえいえ。どうぞごゆつくりして下さいね。」

銀八「……」。

慧音（（銀八）先生…早く用件すました方がいいんじゃないか？）

銀八（こそこそしてまで言うことじゃないと思うがねえ…。他もあるし、ジャンプ読みたいし…。）

慧音「結局ジャンプかい!!」

銀八「おっと。まさか人ん家で暴力行為はいかなmondeshiyouかねえ。」

慧音「…。後で憶えといてくださいね。」

やっぱり顔は笑ってるが後ろからとてつもない雰囲気のでてる慧音である。

さすがの銀八も顔から冷や汗がでている。そんな状況をすす笑いで見てるこなた。

こなた「先生。」

慧音「あ…そうだったな。ほら、早くアンケートを。」

銀八「へいへい…。ほれ、」

慧音「面倒くさそうにしないで下さい（銀八）先生。…そういえばこなたさんは今日、一人か？」

こなた「うん。お父さんは、ちょっと用事に。」

慧音「お母様は？」

銀八「あ…バカ。」

こなた「お母さんは、物心つく前に亡くなってるんだあ。」

慧音「あ……すまない。」

こなた「良いって。良いって。あ、書き終えたよ。」

慧音「ああ……すまないな。」

銀八「……。」

慧音「ん？どうした？」

銀八「……いや、何でもないっす。」

なぜか銀八の顔が何か寂しそうだったのが不思議でならない慧音であつた……。

慧音「今日は本当にすまなかつたなあ。」

こなた「いえいえ。そういえば銀八先生？」

銀八「ん……なんだ？」

こなた「私と慧音先生が話してる時、お母さんの仏壇に向かって独り言喋ってたんですか？」

銀八「いやあくてめえの母さん可愛いなあっと思って。」

こなた「それにしては、何か驚いてたりしてたような……。」

慧音「まあ銀八先生だからな。変な事をしてても可笑しくないだろ？」

こなた「はははっ。あ！もしかして先生、お母さんに惚れた？」

銀八「…まあそんな所にしといてやるよ。」

慧音「じゃあ、次に行かなければならないからこれで失礼するよ。」

こなた「またきてね〜」

その言葉と共に銀八たちは、泉家を後にした。家から距離を置いた所で慧音が口を動かした。

慧音「…ところで（銀八）先生は、こなたの母と何を話していたんだ？」

銀八は「！！」と驚いた顔をした。

銀八「あんた…。見えてたのか？」

慧音「まあ…ね。こなたさんには、見えていなかったし、先生と何か話してたからずっと喋りかけなかったんだ。…でどんな話をしてたんだ？」

銀八「『あんたのお子さんは、心配しなくても元気でやってるよ。』的な？」

慧音「相変わらずのいい加減さだな。…しかしこなたの母さん^{はは}がそんなに安心した顔をしていたならよほど良いことを言っただんだな。」

銀八「…別に俺は大層な事言っただけぞ。」

慧音「…まあ深入りはよそう。アンケートの方もほとんど終わったし。これなら今日中に終わりそうだな。」

銀八「なあ先生よお…。」

慧音「ん？」

銀八「家族って良いもんだな。」

その言葉を言った銀八は、とても寂しそうな顔をしていた。

慧音「…そうだな。」

事情は知らないが寂しそうな顔をしていた銀八を見てそう言うしかなかった。

く 9 . 5 ノ 訓 く 真面目に息抜き（前書き）

感想と出したい作品大募集です。 知ってる作品なら早めに出したいと思います。 知らない作品なら頑張って調べて出したいと思います。

く9・5ノ訓く 真面目に息抜き

慧音「あ…次はどこ行くのだ？」

銀八「いや、もう色々面倒くさいから終わったことにしない？つと
いうことで学校に向かってマウス。」

慧音「…貴方に…」

この言葉とともに右手がそれはそれはとても力強い拳ができてるこ
と。

慧音「責任という言葉はないのかあああああ！！」グシャッ

慧音のストレートパンチが銀八の顔に直撃し「ブベラッ」と言いな
がら100m近く飛んでいった。

慧音「しまった…やり過ぎたか…。」

そんな事を言いながらも顔はなぜかスッキリしていた。

銀八「痛えじゃねえかアアアア！！。俺を殺す気がコノヤロー！
！」

慧音「前話でせっかくお前の評価が上がりがけてたのに台無しだ！
！」銀八「うるせえ！！前話で俺がしんみりしてたのをあんたが勝
手に同感覚で評価しただけじゃねえ…」

銀八がそういいかけ、慧音の顔を見るとそれはとてもとても般若顔

で銀八も冷や汗と恐怖で体が硬直していた。

慧音「…今まで私は、先生の事を批判してた分、泉家の件で何となく先生が生徒から信頼を置いてる訳が少なからず分かってたつもりでしたが…が…」

慧音「最後まで責任を持たずいい加減の度が過ぎ、しかも今回の件についても反省をする素振りもしない…」

慧音「もう限界だ！！貴様の手伝いはしない！！私は……今回の件で少しでも銀八先生の『その！！』いい加減な性格や態度などを一掃させて真面目な先生に近づかせようとしてやりたかった…。」

銀八「へえ…あんた、そんな事だけに俺の手伝いしてたのかい…」

慧音「私は昔から真面目な生徒にしてやりたい…そんな気持ちで教師をしてきた…。そしてこの「銀魂高校」に転勤してきた…。」

慧音「そして来てみれば私の予想や概念を越えていた…。前に勤務していた高校も大概だったが銀魂高校は、言葉では言い表せないと言えなかった…。特にZ組は噂に聞くと全クラスの中でも一番酷い…そしてそのZ組の担任が一番の原因と…」

銀八「俺ってそこまで言われてんの？」

銀八の質問も無視し慧音の話が続く。

慧音「そりゃあ更正させたかった…。少しでも銀魂高校の評価を上げたいとも思った…。しかし本当は、生徒を立派に真面目な高校生にしてやりたい…。運悪く歴史の教科が服部先生と被ってしまった

ため2組に顔を出せなかったがならせめて担任を更正させれば少しは、クラスもよくなる…そう思って今回の件で先生に反省させ、少しでも更正されれば良いと…思っていたのに…」

銀八「…おいおい、そこまで自分を責めなくてもいいだろ？」

慧音「…誰のせいだと思ってるんですか…。」

銀八は、暗くも悲しい顔をしていた慧音を見てため息をついた。

銀八「もう疲れてんだろ…先に帰っていいですよ。」

慧音「しかし、貴様が逃げてしまう可能性が…」

銀八「あんたにあそこまで言われれば、嫌でもやらなきゃいけない空気になってるじゃないっすか。」

慧音「空気って…」

銀八「それに…」

慧音「？」

銀八「自分でいうのも何だが俺やあいつらの性格なんてどんなにプロの教師だろうが何だろうが治らねえよ…。バカでうるさくて、事件ばっか起こして他のクラスより授業してねえし。」

慧音「だからそこが貴様らの…」

銀八「だがなあ…。」

慧音「だが？」

銀八「俺もあいつらも自分縛ってねえし良い意味でも悪い意味でも自分自身を解放してるぜ？あんたも実は自分縛ってるんじゃない？」

慧音「自分を縛ってる…私が…。」

銀八「真面目にするのも悪い事するわけじゃねえ…。だが、息抜きつつ言葉も忘れねえことだな。」

慧音「……。」

銀八「まあ後は、何とかするからよ。先生は早く帰った帰った。」

慧音「もう一度確認しますが…逃げたりはしませんよね。」

銀八「そこまで説教喰らったらやらないわけにはいかないっしょ。」

そういうと銀八は、学校の方角に行った。慧音は銀八先生の言う通り、家に帰ることにした。

慧音「息抜きか…確かに少し堅物だったかもしれない…。」

そう言っただけ息をした…。すると後ろから慧音を呼ぶ声が聞こえた。

？「せんせーい！」

慧音「ん？」

慧音が振り向くと何かの帰りか新八の姿があった。

新八「いやぁ偶然ですね。丁度、買い物の帰りだったんですよ。」

慧音「そうか。しかし家は逆側じゃないのか？」

新八「なんか帰りに会っあ銀八先生に『俺は（慧音）先生を慰められねえから俺が言ったってバレないように励ましてこい』って言われたんで。どうかしたんですか？」

慧音「…素直じゃない先生だな…。いや、申し訳ないが実は君たちのクラスをバカにしていたんだ。君たちも…君の教師も……。」

新八「ハハハ…。まあ言われてもおかしくないですけどね…。」

慧音「しかし君の家での事件？でZ組の印象が少しは、代わったんだ…。」

新八「あんときは、本当すいません…。」

慧音「いや良いんだ。そのあと、泉の家に行った後、ちょっと口論してしまっただ…。銀八先生に『真面目もいいが、息抜きも大切なんじゃない？』って言われてな…。色々考えてたんだ…。」

新八「息抜きもいいなんて真面目の言葉も無いあの人には言われたくありませんね。」

慧音「新八くん…一つ聞きたいことが…。」

新八「なんですか？」

慧音「君のクラスの担任を…どう思っ…」

新八「ん〜。ちゃらんぼらんで大人げ無くて、糖尿病寸前でまあ一言で言うとかダメ教師ですね。」

慧音「やっぱりか…。」

新八「ですけど。」

慧音「？」

新八「いざとなったら頼りになる先生ですかね。」

新八は、少し笑っていた。

慧音「ふふっ。そうか…」

慧音も少し笑っていた。

慧音「少しスッキリした。有り難う新八くん。」

新八「僕は別に何もしてませんよ。」

新八は、照れくさそうに言った。

新八と別れた後、慧音は、あのクラスが何だかんだで悪いクラスではないんだなあ…なんて思いながら家に帰っていった…

（翌日の職員室）

慧音「つで今なんと？」

銀八「いやあだからっすね。昨日、学校に戻って何か方法がねえかなあて考えてたら丁度絶望先生がいたんで何とか頼んで（脅して）2時間でやってくれました。」

慧音「へえ…つまりは、糸色先生を脅して自分は、ゆっくりジャンプ三昧でしたか…。」

慧音の顔がそりゃあ怖いこと怖いこと（ry

銀八「ギクツ。いやあ自分も手伝いましたよ。」

慧音「全部、糸色先生から聞いたんですけど…まさか糸色先生が嘘をついてるとでも？」

銀八「…いやあ、なんか用事思い出したわあ。つつことで…」

銀八が逃げようとしたが見事に慧音に捕まった。

慧音「頭突きと拳…どっちもいい？」

銀八「え？選択肢じゃないんすか？」

慧音「糸色先生の分です。」

その日、学校からそれはそれは見事な悲鳴が聞こえたという

く10ノ訓く 久々に好きな人に出会ったら彼氏が出来てました。
：

く次の日く

はあ……。相変わらず新八は、ため息をしていた。

神楽「あー！私のハムソーセージが盗まれたアルー！」

キヤサリン「今回二限ッテハ、私何モ関係ネエヨ。」

神楽「まじアルか？！じゃあ誰が私のハムソーセージ取ったネー！！」

キヤサリン「決シテ、中々ジューシーデ旨カッタハムソーセージナ
ンテ奪ッテネエヨ。」

神楽「やっぱりお前アルかあああああー！！」

キヤサリン「ウルセエヨー！私ノ国ニハ『弁当八俺ノ物。ヤット出
番来テ嬉シイゼ』ッテイウ格言ガアルンダヨー！！」

いやいや…それ格言じゃなくてあんたの感想でしょ、なんて突っ込
んだのは勿論、新八である。

神楽「あん？そんな格言屁でもないネ！私の国には『弁当箱を盗む
べからず。作者が一話を消して大失態！』て言う格言があるネー！！」

格言で作者傷つけるなよ！

なんて突っ込んだのは、勿論作者自身である。

新八「いや、自分で言うんかい!？」

などと突っ込みをしている新八の隣では…

沖田「いやあゝ。やっと出番がきやしたぜい土方さゝん。」

土方「そうだな。これで当分は、出番減らないだろうよ。」

沖田「できればに奴隷42号と土方さんは、一生出番なくてもよかったんですけどねえ。」

桂木「あゝあゝ（何かもう慣れてきた自分が怖い…）」

土方「何なら今からでもてめえを一生出番無くしてやるつか…。」

沖田「いやいや。冗談なわけじゃないですかい。」

土方「冗談じゃねえなら余計たち悪いわ!! つつかそいつそろそろ放してやれよ…見てるこつちまで虚しくなるだろうが…。」

沖田「いやあゝ。そうする気は、さらさらないんですがねえ。こいつ（桂木）の助手とかいうやつとたまたま会いましてねえ。なんかそいつもドSらしくて意気投合したみたいで一番面白い玩具があるっていうから聞いてみたらこいつのことだったという話でさあ。」

桂木は九死に一生と言う言葉が似合うほどの泣き顔をして土方に助けを求めようと土方の顔を見たが土方は気づかない。…振りをしていた。

土方「まあ…程々にしとけ。」

沖田は「へい。」と全く反省してない返事で返した。

相変わらず沖田さんと土方さんは仲が良いのか悪いのかよくわからない喧嘩してるなあ…。あと桂木さん放してやろうよ…。なんて思ってる新八の後ろでは…

近藤「お妙さん！俺が作った短歌を聞いて下さい！」

お妙「なんで朝からマウンテンゴリラの短歌なんて聴かなきゃいけないの？」

近藤「まあまあ。そんなこと言わずに聞いて下さいよ。『お妙さん
ラヴィラヴィラヴィデイ ラヴィラヴィデイ ラヴィラヴィラヴィ
イラヴィ ラヴィラヴィデイ。』どうです？！とても良い短歌でしょ！…グハッ」

とても気持ちよさそうに歌っていた近藤に教科書と何故かスコップが飛んできた。勿論、教科書はお妙、スコップは木津である。

妙「いきなり朝から蓮コラを想像させるくらいのグロい短歌なんて聴きたくなかったわゴリラさん。」

木津「何そのキツチリしない短歌は！！聴いてるだけで体がムズムズする！！っていうか貴方、ストーカーならキツチリとストーカーらしくしなさいよ！！」

近藤「俺はストーカーじゃねえ！！言うなれば狩人^{ハンター}です！愛の。」

？「お笑いね。自分をストーカーと自覚してないなんてねえ。」

？「同感だね。私なんて時空を通り越しても追いかけて行ったもの。」

木津「そ…その声は！？」

近藤「ま…まさか…」

？・？「そう！私たちは！！」

あやめ・ほむら「ストツカーズ！！」

謎のシルエットとともに窓から…ではなくロッカーから一人づつ声と共に出てきた。猿飛あやめと暁美ほむらである。

猿飛「私たち、ストツカーズにかかれば自覚の無いストーカーだろうが。」

ほむら「ストーカーになりたいけど仕方が分からない人でも。」

猿飛・ほむら「すぐに解決してやるわ！！」

近藤「でた！この学校の中で3（スリー）ストーカーで名が通る猿飛あやめ、暁美ほむら、そして…」

（職員室）

絶望「はあ…そろそろ朝のホームルームが始まりますね。てうか絶望って書くなああああ！！」

常月「全くですね。糸色先生。」

絶望「うわっ！いつの間に後ろに居たんですか…」

常月「朝からずっとです…。」

絶望「気づきませんでした…。っていうか早く教室に戻った方が良いんじゃないですか？」

常月「大丈夫です。今日はストーカー記念日と言ってストーカー限定の休みの日ですよ。」

絶望「そんな祝日初めて聴きましたよ！！…とにかく！早く自分の教室に戻りなさい！！」

常月「どっちにしろ同じクラスだから良いんじゃないですか。しかし私はあくまでもストーカー…先生が先に行かないと後をつけられないんです…。」

絶望「ストーカーにそこまで本気にならないで下さい！！…ていうかいい加減、絶望って書くなあああああっ！！」

くZ組

木津「近藤さん。諦めることね。この人達に目を浸けられたらもう貴方は、ストーカーと認められたようなものよ。ここでキツチリ、ストーカーと認めなさい。」

近藤「嫌だ！嫌だ！俺はストーカーじゃないもん！！愛の狩人^{ハンター}だも

ん！！」

猿飛「まだ言ってるの？ふっ…。陰湿でしつこく、恋に不器用…ストーリーカーの心得を得ているじゃない！その時点であなは、立派なストーリーカーよ！！」

ほむら「まあ私の場合は、まどかを守りたいだけよ。そのためならストーリーカーと言われようが彼女を守る…。ただまどかには嫌がられてないけどね。」

猿飛「あら？ちょ…ほむらさん？何…自分はシリアスな理由があるからストーリーカーになったって…え？何自分だけ綺麗になろうとしてんの？何自分は、好きでストーリーカーになったわけじゃない的なこと言ってるの？」

ほむら「あら。事実を言っただけよ？猿飛さん？私は、まどかを守りたいの一言でこうやってまどかを守ってるのよ？まあストーリーカーは、あなたのお陰ではつきりと公言できるけど本当は、ストーリーカーではないのよ？私は、まどかを守る唯一の砦なのよ。」

猿飛「ハイハイ、シリアスにしようとして何誤魔化してんの？私たちはね、どんなに汚くてもストーリーカーじゃないといけないの！！みんな泥ん中必死にはいずって相手をストーリーキングして少しでもキャラ立てしなきゃこの小説だと生きていけないの！！」

ほむら「ふっ…お笑いね。貴女がそんな理由で銀八先生をストーリーカーしてたなんてね（笑）。ストーリーカーにとって必要なものを忘れてるんじゃない？」

猿飛「何よ！！言ってみなさいよ！！！」

ほむら「それは……」

猿飛「それは……？」

ほむら「愛よー!!」

猿飛「!？」

ほむら「貴女は原作の人気投票篇以来、キャラ立てに必要で愛を忘れてたのよ？それでよくストーリーカーの何もかもを知ってるなんて言われるわね。」

猿飛「……」

ほむら「けどね……。」

猿飛「……？」

ほむら「人気投票篇前の貴女は、ストーリーカーに対してとてつもない愛を感じた……。常月 まといにも同じようなものを感じたのよ？確かに最初は、ストーリーカーの言葉を邪見してた……けど貴女たちに色々教わっていくうちにストーリーカーという言葉が嫌にならなかったのよ？……どんな理由だろうとその泥で汚れようが暗黒面に堕ちようが……さつきは、ついイラストときて自分はストーリーカーではないなんて言っただけだね……貴女たちは、私に愛の本当の力を与え教えてくれたのよ?!」

猿飛「!!!……私もバカね……本当にストーリーカーの心得を得てなかったのは私だったみたい……。まさかほむらさんから言われるなんて私

もまだまだだったのかしら…。」

ほむら「そんなことないわ。どんな辛いことだろうと貴女たちが支えてくれたからこそ私はまどかを守るのよ？ 貴女たちが居たからこそ… 私はまどかの砦になることができたのよ？」

猿飛「…ふふ」

猿飛・ほむら「はははははっ…。」

猿飛とほむらは、高々と笑った。

猿飛「これでまたストッカーズの友情が人一倍芽生えたわね。」

ほむら「ふっ…。」

猿飛「…近藤さん？これでストーカーの何たるかを心得たはずよ。ストーカーと言ってもねえ、悪い言葉じゃないのよ。守りたい者の砦になりたい…。恋愛に不器用だけど好きになった彼女を見守り続けたい…それが…。」

ほむら「それが…。」

猿飛・ほむら「真のストーカーなのよ！！」

近藤「…そうか。俺は今までストーカーの意味を分からず敬遠していたのか…。しかしフタを開けてみればなんて美しい言葉なんだ…。よし！！俺もストッカーズに入る！！…そして、…お妙さんの愛を掴むまで俺は愛の狩人になる！！」

猿飛「その調子よ、近藤さん。」

ほむら「これでまた、愛の狩人^{ストーカー}が増えたわね。」

近藤「これからもよろしくな。」

猿飛「ふっ…」

ほむら「ふっ…」

近藤「ふっ…」

猿飛・ほむら・近藤「「（だ）はははははっ…」」

3人は気持ちよく笑った。それはもう清々しいほどに…。

ストッカーズ「俺たちの愛の狩人^{ストーカー}はこれからだ！！！」

「次の銀時マニアの作品にご期待下さ…ピキーンッ

ストッカーズの左側から何か音がした。

？「最小限…」

ストッカーズ「え？」

？「マスタアアアスパアアアアク！！！」

声と共にかめはめ波を連想させる物がストッカーズに向かって放出されていた。察していたのか、猿飛とほむらは、素早くロツカーの

方に戻っていった。

近藤「えっ？あれ？ちよっ…え？……ギヤアアアア。」

近藤が星になりました。

妙「ありがとうね、魔理沙ちゃん。あの訳の分からないストーリーカー達の茶番劇でこの小説終わらせたくないもの。」

魔理沙「ハハハッ、全くだぜ。」

…長えよ！！何ワケわからない茶番劇でこんなに小説の幅、狭くしなきゃならないんだよ！！つか姉上もなんつうこと霧雨さんにやらせてるの！。しかも霧雨さんものつてるし…なんて心の中で新八は突っ込んだ。…そしてチャイムがなったとともに、教室の扉が開いた…。

銀八「ギヤーギヤーギヤーギヤー、うるせえんだよ！出番が来たからって騒がしくしてんじゃねえ！！」

やっと現れた主人公…と

慧音「初めて来るが朝から騒がしいな…君のクラスは…。」

慧音先生である

く11ノ訓く 1日体験でも1日以上体験することって…（前書き）

何か出してもらいたいアニメ・漫画作品などが有りましたらどんどん希望を下さい。作者が頑張れる分に出していきますので…あと作品の感想なども募集しています。どんどん待ってます！！

「11ノ訓」 1日体験でも1日以上体験することって…

新八「あれ？慧音先生じゃないですか？何かあ…」

銀八「はい、そのメガネピクミン。今から俺が説明しようとするのを邪魔しないように。」

新八「誰がメガネピクミンですか！！ていつか当たり前の疑問を言っただけじゃないですか！！」

そんな新八の言葉を無視して会話を続ける。

銀八「えゝ突然だが今日、この白沢先生を1日担任体験することになった。」

神楽「分かったアル！！どうせあの卑猥突起物校長に強制されたアルか！！」

慧音「神楽さん、校長にそう言う事を言わない！一応学校では偉いんですから。あと女の子が卑猥突起物なんて言わない事。」

新八「先生もさりげなく酷いこと言ってますよね。」

慧音は、少し顔を赤くしながら咳払いした。

慧音「ここの1日担任体験を志願したのは、私自信です。」

こなた「なんでここのクラスを担任体験したいと思ったんですか？」

慧音「実を言うと噂で3年クラスは、結構ひどいと聞いている。」

魔理沙「ここ以外のクラスも酷いなんて初耳だぜ。」

慧音「それほどどのクラスも異常と言うことだ。…特にZ組は、破天荒、問題児が全クラス中多く、真面目な人が5人いるか居ないかだけ…。まあ極めつけは、ここの担任だ。つまりは…」

慧音は一瞬、間を溜めて言った。

慧音「ここは、魔の世界!!!…漂流教室ならぬ暗黒教室だ!!!」

沖田「土方さん、今の笑うとこですかい？」

土方「俺に振るな!つつか察してやれよ。先生はこの日の為に必死に考えたギャグなんだろう…。面白くなくても笑うのが筋つてもんだ。」

新八「土方くん?!それフォローになってないから!」

キャサリン「大体、先生ト私ノキャラガ被ッテンダヨ!!頭ノ角ト私ノコノ可愛イ猫耳ガヨオ。」

新八「被ってねえよ!!角と耳は別物じゃん!!つつか見た目でもう被ってねえし!!!」

神楽「そうネ!私のハムソーセージを奪った貴様は敵だ!慧音先生こそが正義アル!!」

新八「まだそのこと引きずってるんかい!!」

神楽「ハムソーセージをあなどっちゃいけないネ！！私がどれだけハムソーセージが好きか教えてやるヨ！！」

♪ハムソーセージの歌♪

ハムソーセージお〜いしそお〜♪

ハムソーセージた〜べたいな〜♪

ハムソーセージ…

新八「アウトオオオオオツ！！それ丸々CMのパクリじゃねえか！！」

神楽「因みに自作で125番まで作ったネ。」

新八「どんだけ作ってたんだよ！？何その無駄な努力？！！」

神楽「なんかいつぱい作ったら願いが叶えそうだったアル。」

新八「ならないから！！ドラゴンボールみたいには、ならないからね！？」

慧音「…銀八先生？」

銀八「…まあ言いたいことは分かる。」

慧音「なら聞かないですけど…何かアドバイスは？」

銀八「まず自分なりにしてみた方がいいんじゃないっすか？」

慧音「…分かりました。」

慧音は、教卓の方に言った後、いかにも教卓を叩く準備をしていた。

慧音「いい加減に……しろオオオオオツ！！！！」バアアアアア
ン！！

とても物を叩いた音とは思えない音が起き、それと同時に教卓が粉々になった。さっきまでザワついてたクラスが一気に沈黙に変わった。

慧音「貴様ら……。担任が教室に居るにも関わらず大声だすわ、私が必死に考えたボケを恥じかかす程に罵倒するわ、突っ込むわでどうも学校の在り方と言うものを（銀八）先生含めて鍛えなければいけないみたいね……。」

銀八「ぶっ……。俺もかよ……。」

慧音「とにかく今日は、補習だ！！勿論全員だぞ！！学校のいろはを叩きこんでやる！！因みにもし今日、朝から学校終わりまで”真面目”にしていたらその人達は早く帰そう。」

最後の発言にクラスのひとつがいきなり机に教科書を勢いよく出し、勉強し始めた。

慧音「……これは、なかなか教育しがいがあるなあ。この調子ならあと一週間、校長に頼んでここのクラスを真面目なクラスにしよう。」

銀八「あれ？確か何話か前に銀さんが言いこといつてたことは？」

慧音「物にも限度があるだろう。後、（銀八）先生にも補習強制参加ですからね。あ、言い訳したら頭突きますから。」

銀八「ですよ〜。」

このあと、慧音先生のみつちり指導によりみんな当分の間ざわめきすら聞こえなかったと言う

「11ノ訓」 Z組に日常は来ないby新八

「校長室」

銀八「で？何の用ですか？」

銀八はキッチンでホールケーキを作りながら言った。

ハタ校長「だからここ校長室だから。つつかなんで校長室にキッチンがあるんじゃ？！あとケーキを作るな！！あくまで校長室だから。あと目の前に校長居るから！？」

銀八「で？…モグモグ…何のモグモグ…用ですモグモグ…か。」

ハタ校長「いや！？校長の前でケーキ食いながら話を聴く気？！」

銀八「言つときますけどケーキやりませんよ。」

ハタ校長「いるか！？…まあよい…（銀八）先生を呼んだのは他でもない。」

銀八「モグモグ…モグモグ…。」

ハタ校長「…。いい加減にしないと今月のボーナス抜きにするぞ。」

その言葉と共に銀八が異常なスピードでハタ校長の触角を引きちぎった。

ハタ校長「痛たアアアアアッ。何するんじゃ！？」

銀八「こっちは、大事な昼休み犠牲にしてまで来てるんすからケーキぐらい食ってもいいじゃないすか。」

教頭「まあまあ。こんなバカでも校長なんで、一応話を聞いて挙げてくれないですかねえ。」

ハタ校長「おい。何、お前向こうの味方してんだ教頭。」

教頭「原作での活躍見たらあんたより銀八先生の方を取るに決まってるんだろ。」

ハタ校長「んだとコノヤロー！！今ならてめえを殺せるからな！！ホントに殺るよ？！今なら殺れるよ？！」

銀八が痺れを切らせたのか、ハタ校長の両頬を力強く掴んだ。

銀八「早くしてくれませんか。いい加減にしねえと昼休み終わっちゃうんで。」

ハタ校長「いだだだだっ！！分かった！！分かったから離して！！」

銀八は少し溜め息をしたあと、手を離れた。

ハタ校長「いたたた……。じ……じああ用件を話そう……。」

ハタ校長「実は、この学校に転校生が来るんじやが、君のクラス……つまりZ組に入りたいんじや。」

教頭「よくあの魔のブラックボックスに転校生を入れれるよな。」

ハタ校長「タメ口はよせつつてんだろクソ教頭！…あ、早く用件話すんで頬を鷺掴みしないで…」

銀八は、イライラMAXで手がハタ校長の頬を鷺掴みしようとしていた。

ハタ校長「コホン。…で何故君のクラスに入れるかと言うと…。」

ハタ校長「その転校生が……………」

ハタ校長「ロボットだからじゃー!」

〈11ノ訓〉 Z組に日常は来ないboy新八

銀八「つつことで明日、うちのクラスに転校生が来る。以上、帰りのホームルーム終わり。」

新八「いやいや?!待ってくださいよ!?!」

銀八「ん?自分は眼鏡が本体って気付いたか?」

新八「んなわけねえだろ!!冒頭の校長のタイトル前のセリフについてなんか言うことないんですか?!」

銀八「今話すの面倒くせえんだよ…。いや、あれだよ…あ…やつは面倒くせえわ。何が面倒くせえって…やつは面倒くせえわ。」

新八「結局面倒くせえだけじゃねえかアアアアアツ!!!!」

新八の突っ込みと共に後ろの席から声が聞こえた。

ヘドロ「先生。自分もその転校生の事が気になるのでお話して頂けないでしょうか…。」

銀八「分かった…話しますからどうかお怒りを鎮め下さい。」

顔が真っ青になりながら銀八は言った。

銀八「えー…。まあ明日、転校生が来るわけだが…。そいつは、どうもロボットらしい。」

神楽「別にいいじゃん。ここのクラスにも、たまがいるアル。」

銀八「まあそれが転校生をZ組に入れる理由の一つだがな…。」

新八「他に理由があるんですか？」

銀八「どうもそいつは、周りに自分がロボットと思われたくねえらしんだ…。あのバカ校長が言うには、その転校生が他のクラスに入ったらそいつが必ずしも…つうわけじゃねえが周りから浮く可能性があるらしんだわ。つで普通のクラスより破天荒で魔のダークファントアジアと言われるZ組に入れば浮くこともねえし。」

新八「へえ。…ん？…その転校生ってたまさんと同じで見た目は一般の高校生ですよな？」

銀八「いや…ある一ヶ所を除けばらしいがな。」

こなた「ある一ヶ所って？」

銀八「それは……」

新八「それは？……」

銀八「それは……」

こなた「それは？……」

銀八「それは……」

桂「それは……じゃない桂だ!!」

銀八「それは……」

エリザベス「それは？……」

銀八「それは!!……」

魔理沙「それは……だぜ？」

銀八「それは!!……」

新八「って止めんかアアアアアッ!!行稼ぎと勘違いされるわ!!」

神楽「実際にただの行稼ぎアル。」

新八「いや、そういう発言しないでいいよ、神楽ちゃん……。」

銀八「つつことだ。どうせ明日来るんだからそんなとき確かめりゃいいことだろ？じゃあ帰りのホームルーム終了。」

起立！ 礼！ 銀魂「謎の号令と共にホームルームが終了した。」

とある研究所

？「博士。」

はかせ「ん？」

？「明日行く銀魂高校ってどんな所ですかね。」

はかせ「ん」校長から聞く限り、変な人が多いって言われたよう
な。」

？「本当ですか？」

はかせ「まあいいじゃん。それよりご飯まだ？」

？「はいはい。坂本さ」ん。ご飯ですよ。」

坂本「おう。」

？（明日が楽しみだな。それよりロボットってバレなきやいいけど。）

楽しみと不安の境界線を行き来しながら明日を待つ、東雲とうぐもなのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0475l/>

3年Z組銀八先生～愉快的生徒と先生たち(いろんなキャラが出ます。)

2011年8月23日15時26分発行